

# アイヌ文化期の自然のようす

環境

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展 今、そして未来へ

用語

さくいん



今の十勝の林。かつては、今よりもはるかに太い木が、はるかに深い森をつくっていた。今ある林のほとんどは、一度切り開かれている。

アイヌ文化が広がったころの自然は、明治になって内陸開発が始まったころと、ほぼ同じすがたをしていました。今では開発が進み、十勝のほとんどの場所で、もとのすがたを見ることができなくなりました。

石狩山地や日高山脈に囲まれた十勝平野の台地には、カシワやミズナラを中心とした広葉樹の大木が、大森林をつくっていました。森の地面には、落ち葉が重なって土にかえり、さまざまな草が育ちます。

積雪が少ないことから、エゾシカが冬をこすため、群れをなしてやってきたといえます。( p145 )

川岸の肥えた土には、ハルニレ、ヤチダモ、キハダ、オニグルミといった木々が深い森をつくり、シマリス、タヌキやフクロウなど多くの動物が暮らしていました。



(上)人の手がほとんど入っていない十勝川中流(明治29年発行の地形図・着色)。(下)最近の同じ場所(平成12年発行の地形図)。

## 曲がりくねり分かれる川

今では、川は堤防の間をほとんど1本の川すじで流れていますが、これは人が作り上げた形です。

もともと、平野を流れる川は、両側にある丘(段丘)の間を大きく曲がりくねり、あるいは何本にも分かれていました。

大きな洪水があれば、湖のようになることもあり、それまでとはちがった流れにもなりました。そんな時には、草木も流されますが、洪水が引いたあとには肥えた土が残され、新しく豊かな林をつくる土台となりました。

十勝川下流の平地には湿原が広がり、春になると本州で冬をこしたタンチョウがきて、子育てをしていたことでしょう。

(地図は国土地理院所蔵・刊行の1/5万地形図(止若・十勝池田)を使用。70%に縮尺)

## 川にあふれるサケやイトウの群れ

曲がりくねる川には、深いところや浅いところ、流れの速いところやおそいところなど、いろいろな状態ができます。また、森が岸をおおう川には、落ち葉や虫が落ちることでエサがたくさんあります。

アイヌ文化が広がったころの川には、さまざまな魚がたくさん生きていました。春にはそれまで深い川底にいた大型のイトウが、卵を産むために上流の浅瀬へ向かいます。中には1mを軽くこえるものもいました。

また、秋には海で大きく育ったサケが、きれいなわき水の出る場所をめがけて、産卵しにやってきます。かなりの数だったようで、「かつては、小さな川では棒がたおれないほどだった」という話も伝わっています。



川をさかのぼるサケ(猿別川・幕別町)。

1 広葉樹(こうようじゅ): カシワやカエデなど、広くて平たい葉をもつ樹木。北海道の自然林の広葉樹は、冬になると葉がかれ落ちる「落葉広葉樹(らくようこうようじゅ)」。  
2 多くの動物(おおくのどうぶつ): エゾオオカミやニホンカウソウなど、今では絶め

つした動物もいる。  
3 さまざまな魚(...さかな): チョウザメは昭和時代に十勝からすがたを消した。( p93 )  
4 アイヌ語で自然と出会う: 参考図書「アイヌ語で自然かんさつ図鑑(帯広百年記念

## アイヌ語で自然と出会おう<sup>4</sup> ... 身近な存在としての自然<sup>そんざい</sup>

多くの生き物にアイヌ語名がついていて、人とのかわりが深いものには、とくにくわしくついています。

植物でいえば、食べものとなるギョウジャニンニクは「ブクサ」、オオウバユリは「トゥレフ」、また狩りの時、矢の先にその強い毒<sup>どく</sup>をぬったトリカブトは「スルク」といいます。

動物では、食べものや毛皮をくれるエゾシカは「ユク」、キタキツネは「チロンノフ」(私たちがたくさん殺すもの)といい、大きくて強いヒグマは「キムンカムイ」(山の神)と呼ばれていました。

川の魚では、サケのことは「カムイチェフ」、つまり「神の魚」といい、これも大切な食べものであるイトウは「チライ」といっていました。(魚の名 p119)

フクジュソウは、十勝では「チライムン」といいますが、これは「イトウの草」という意味です。春先、フクジュソウが花を開くとイトウが川をさかのぼってくるので、漁を始める合図としていたのです。

上士幌町の「東泉園( p120・p129・p131)」では、上士幌ウタリ文化伝承保存会の人たちが、十勝のアイヌ民族が利用してきた植物を育て「アイヌ植物園」をつくっています。

大雨による土砂くずれにあうなど、多くの苦勞<sup>きちやう</sup>をしながらつくり続けられている、とても貴重な場所です。



「トゥレフ」 オオウバユリ。



「チロンノフ」 キタキツネ。



「チライ」 イトウ。  
(飼育: 幕別町ふるさと館: 5)



「チライムン」 フクジュソウ。



「アイヌ語で自然かんさつ」。帯広ひゃくねんきねんかん百年記念館( 6)による観察会。  
(十勝千年の森・清水町羽帯)



「東泉園」(上士幌町)の「アイヌ植物園」。

注: この本では基本的に十勝地方のアイヌ語名を紹介しています(他のページでも)

## 目で見る自然の大変化 ... 植生図<sup>しょくせいず</sup>でくらべる十勝

右の2つの図は、どんな植物が生えているかで色分けをした「植生図」です。

左側は、もし人が自然を変えなかったらどうだったか、という図で、右側は今のようすです。

小さくしているので細かい分け方はわかりませんが、それでも、今の図では、オレンジ色が目立つことがわかります。ここは、畑になったところです。

また、緑色の部分も、よく見れば色が変わっています。さらに、同じ色のままでも、木の太さや生え方が大きく変わっていることがあります。



潜在自然植生図。もし、人が手を加えなかったら、という植生図。



現存植生図。今のようすはどうか、という植生図。

「北海道現存植生図(日本植生誌 北海道)」宮脇昭・奥田重俊、国土地図、至文堂、1988

「北海道潜在自然植生図(日本植生誌 北海道)」宮脇昭・藤原一絵・中村幸人・大野啓一・村上雄秀・鈴木伸一、国土地図、至文堂、1988

館)=十勝のアイヌ語名をのせている。「アイヌ植物誌(福岡イト子)」=十勝の名前とは異なることもあるが、利用法、伝説、著者の体験など、とても興味深い内容。  
5 幕別町ふるさと館(まくべつちょうふるさとかん): 幕別町依田384-3(依田公園横)

電話 0155-56-3117 月・火曜日休館  
6 帯広百年記念館(おびひろひゃくねんきねんかん): 帯広市緑ヶ丘2番地 電話 0155-24-5352 月曜日休館